

で、さらに『文部省年報』、『東京大学医学部年報』、『中外医事新報』といった当時の資料を駆使して、歴史の舞台となった医学校や登場する人物にさらに深く切り込んでいる。

本書で取り上げられているさまざまな話題の中でいくつかを取り上げて紹介すると、まずミュルレルとホフマンがもたらした医学教育の変革と、行った授業の内容が詳しく取り上げられている。ミュルレルが東京医学校（後の東京大学医学部）で初めて目にしたのは、300名程の学生が大部屋にたむろし、10～16人のグループで机を囲み、各自がそれぞれに医学書を広げて声を出して読んでおり、時折教師に質問するといった私塾のような状況であり、これが江戸時代から明治初期まで日本の医学校で行われていた一般的な学習方法であった。日本人の教師も学生もこの学習方法を変えようとは思っておらず、分からない事柄に即座に答えを与えたり、特別な治療法上の秘法を伝えたり、といった便利な情報源としての役割をドイツ人教師に期待していた。しかしミュルレルは、学生たちの知識レベルや理解能力を十分に把握した上で、系統的な一斉講義による学習方法に変更するために教育システムの大胆な変革と学生の選抜を、文部卿大木喬任の支援を得て実施する。この変革と選抜を経て東京医学校に残った学生たちが、どのように成長し、そのように活躍していくか、残れなかった学生たちはどのような人たちであったか、著者は、この学校で学んだあらゆる人たちに温かい眼差しを注いでいる。

明治8年に東京医学校に通学生教場（後に別課）が設置され、日本語による簡便な医学教育が開始される。明治10年代には、全国で各地に公立の医学校が通学生教場をモデルとして設立される。明治15年の医学校通則により医学校は甲種と乙種に分けられ、甲種は学士3名以上の教員を必要として卒業生に無試験で免許を与えられ、乙種は学士1名以上の教員で卒業生は試験に合格して免許を与えられる、と定められた。東京大学医学部の卒業生のうち3分の2程度が、全国の医学校で教員として働くようになった。これら卒業生たちは各地の医学校でしばしば校長となり、医学教育システムを改革する一方で、年長の経験に富む部下との間で軋轢を生む場合もあったことを、吉良氏はさまざまな実例を挙げながら冷静で穏やかな筆致で語っている。

本書で語られている明治期の医学教育の実相には、著者が蒐集した膨大な資料による裏付けがあるが、そこに登場する人物については、著者は自らの医師かつ大学教員としての豊富な経験と豊かな想像力をもとに、彼らが体験したであろうことを慈しみ深く語っている。歴史は単に事実の羅列ではない。人間の営みについての心を豊かにする物語であるということを、本書は改めて教えてくれる。

（坂井 建雄）

[築地書館、〒104-0045 東京都中央区築地7-4-201、TEL. 03 (3542) 3731、2010年4月、A5判、212頁、2,400円+税]

## W・ミヒェル、鳥井裕美子、川寫真人 共編 『九州の蘭学——越境と交流——』

この労作は2009年7月1日の刊行である（思文閣出版）。主著者のヴォルフガング・ミヒェル氏は日本医史学会理事としてドイツ人ながら日本に定住され九州大学大学院教授として学生の教育と日本古代史とくに中世時代の日本と各国の交流史の研究に著名な学者であり、平成21年九州大

学教授を定年退官され、引き続き研究講義を九州大学医学部大学院名誉教授として継続して居られるし、共著の川寫真人先生はミヒェル教授と同じ日本医史学会の理事であり、大分県中津市で整形外科病院を盛業されている多忙な臨床活動の傍ら、郷里大分の医史学研究を続けられ、医史学会

の権威の一人でもあられる。鳥井裕美子氏は上智大学院文学研究科の出身で現在大分大学教育福祉学部教授であり、上記二氏と共に九州の蘭学の研究に長年の苦勞を共にされた学者である。

本の序章(はじめに)には九州出身或は九州で活躍した蘭学者と外国人の業績を記した評伝集である。九州は古代から大陸との交流があり江戸時代は対外関係の窓口となった4つの国(松前、対馬、長崎、薩摩)のうち三つを有したと書かれている。

本書は4章に分かれていて第一章江戸前期、第二章江戸中期、第三章江戸後期、第四章幕末となる。

第一章でまず取り上げられるのは南蛮流外科医の祖と云われた沢野忠庵である。彼は本名クリストヴァン・フェレイラと云うポルトガル人で拷問により棄教し沢野忠庵と改名して長崎に住み奉行所の通訳として働き、かたわら医師としての活動も行っている。しかし本来宣教師でありその医学的智識は極めて不十分であり、その学説もその著とされる阿蘭陀外科指南、南蛮外科書も当時の医学書の写しである。乾坤学説はアリストテレスの天動論を基本としたものである。後に日本人の妻を迎え子供も出来1650年(慶安3年)まで生存していた。

次に向井元升(1609~1677)があげられる。彼は肥前神崎郡の向井兼義の次男で元和3年長崎に住み儒学を学び儒学と共に医学を学び医師としても高名であった。明暦元年(1656)に長崎出島商館外科医ハンス・ユリアーン・ハンケより治療法と薬品の調合法を伝授された。元升は日本人医師としてはじめて紅毛流医術を本格的に学んだ人で

ある。それまではオランダ語の通訳がそのまま医術を伝え医師となった場合であり、向井元升の存在は歴史に残る先駆者と云える。又元升は乾坤弁説の成立にも深く関与した。又元升は貝原益軒とも親交があり、益軒は元升から多大の感化を受けたことをその著書に述べている。彼は京都にて没した。

西玄甫(?~1684)はオランダ通詞として活躍、その後医師となった。出島オランダ商館長の江戸参府に同行して三度も江戸へ赴いている。オランダ商館長の手紙に玄甫はこれまでオランダによって医師の資格を与えられた日本の医師の中で最高の者であると誉められている。その後玄甫は江戸に移り医官として働いた。

カスパルシャムベルゲルは西洋医学の東洋における外国人元祖と云われた。ドイツのライプツィヒ生れ、苦勞の末ジャカルタへ行き外科医として活躍した。江戸参府し江戸で名医の誉れ高く、医師の後を継いだ長男と共にカスパル流外科として世を風靡した。

江戸初期の南蛮紅毛外科医として他に河口良庵、原三信があり原三信のレメリンの解剖学書の写しと蘭方外科医の免許状は今に伝えられた貴重な資料である。

他に第二章江戸中期、第三章江戸後期と多彩な医師や藩主の伝記があり一読に値するものとして推賞したい。

(原 敬二郎)

[思文閣出版、〒606-8203 京都市左京区田中 関田町2-7、TEL. 075 (751) 1781、2009年7月、四六判、380頁、2,500円+税]